

ANA班

大庭慎平 小嶋理志 和泉明日香 服部隆太 古屋智士

合同ゼミまでの準備に関する感想と反省

私たちのグループは航空産業(ANA グループ)について前期の終わり頃から作業を始めてきました。そして夏休みの間に各々で企業の概況を調べ、合宿先で報告書をまとめました。

後期に入ってから是有価証券報告書や雑誌、新聞記事を中心に調べ、11月下旬にはプレゼン用のパワーポイントやナレーションを作り上げ12月2日の本番に臨みました。

感想ですが、率直に言うと企業を調べるのがいかに時間が掛かるかということを感じました。特に後半の方ではグラフを作るために様々なデータを探さなくてはならず、初めは苦戦することが度々ありましたが、メンバー同士で協力することで問題を解決していきました。このようなことを通じてメンバーとの信頼が厚くなったと感じました。

反省点は、時間が足りなかったことです。本番までには何とか形にすることができましたが、まだまだ追求できる点があったと思います。他には作業分担に問題があり、一部の人に作業量が偏ることがありました。

合同ゼミにおける報告内容とそれに対する質疑の概要

当日は「有価証券報告書による経営分析」「企業の経営戦略」「現在の戦略の将来性」の3点について発表しました。

「有価証券報告書による経営分析」では、私達のグループはANAとJALの売上高の比較、国際・国内線売上高の比較、国際・国内線の旅客キロの推移、国際・国内線の座席利用率の比較、利益高の比較、自己資本率について発表しました。

売上高は、国際線ではJALが依然高い売上高を出していること、国内線ではどちらの企業もほぼ同等の売上高を出していることがわかりました。

旅客キロの推移ですが、この項目は航空産業のシェアの代用として急遽作成したために、詳しい内容を調べあげることができませんでした。

座席利用率の比較は、国際線が売上高に大きな差があったにもかかわらず、両企業とも65%前後の利用率を出していました。国内線は売上高と同じように、利用率にも

差があまり見られませんでした。

利益高の比較では、2003年に両社に大きな差があり、JALは同年に大きな赤字を出しました。これは前年の世界情勢が影響しています。

自己資本比率では、ANAが年々比率を高めており、経営の健全性が高いことがわかりました。

次に「企業の経営戦略」ですが、これまでのANAは設立当初より国内線を主軸に事業を展開してきました。そしてその後45-47体制により1986年から国際線も開始しました。1994年の関西空港開港後は中・長距離の路線開発を行うも国内線単体では赤字が続きました。その後は採算性重視のネットワークに再構築、成田空港をメインにした戦略になりました。

そして現在の戦略では、JAL及び他社を凌ぐコスト競争力を確立するために、フリート(機材)戦略・リソース(人的資産)戦略・アライアンス戦略の3つの戦略を主に行っています。この3つに共通するメリットはコスト削減が可能で、その浮いた費用を他に回すことができるということです。

他にはマーケティング及びセールスにおける競争力の強化として、国内線・国際線・貨物の三事業に力を入れています。

最後に「現在の戦略の将来性」ですが、世界最大の航空連合のスターアライアンスに加盟することで国際線の提携ネットワークが拡大しました。また国内線ではサービス面の充実により、ビジネスを中心とした個人需要を搭乗に結びつけました。

結果、経常黒字を連続達成しANAの好調ぶりが伺えます。

そして2009年の羽田空港の再拡張・国際化を機会に大幅な国際線の拡大を目指しています。

それだけでなく、ANAとJALの収益格差が拡大しているために、ANAが人気だけでなく経営状況の視点から見ても有利であることがわかりました。

質疑の概要ですが、「旅客キロの推移から何がわかるのか」、「自己資本比率は何を表しているのか」、「45-47体制とは何なのか」、「フリート戦略・リソース戦略・アライアンス戦略の詳しい説明をしてほしい」等という質問が挙がりました。

合同ゼミに対する感想と反省

今回のこの合同ゼミは私達にとって初めての大きなプレゼンテーションでした。発表する前から緊張をしていて、ナレーションはちゃんと時間通りにいくのか、質問にはつきりと答えられるか等と不安で一杯でした。

いざ始まると緊張のためか発表するペースが予想以上に速く進み、急遽新たなナレーションを加えるハプニングがありました。何とか時間通りに進めることができました。

対戦相手の日本大学さんのプレゼンテーションは私達と多少コンセプトが異なりましたが、とても良くまとめられていて今後の大きな参考になりました。

合同ゼミに対する反省ですが、やはり一番の反省点は準備不足です。そのために時間配分のトラブルが起き、傍聴者には混乱を招いてしまいました。また、一部の質疑で答えられないこともありました。

今回のこの経験を通して、今後のために必要な改善点を得るだけでなく、メンバーとの結束力、そして自分の仕事に責任を持つという意識を高めることができたと思います。この合同ゼミは私達にとってとても有益な物になりました。

大庭慎平